（様式５）　　令和２年度　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	Ｒ２Ｋ２１	氏　名	武田　貴裕
研究主題 ー副主題ー	ESDの理解から実践につなげるまでの過程分析 ーユネスコスクール校長へのインタビュー調査の概念化を通してー		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	伊東　哲
所属	多摩市立青陵中学校	所属長	相楽　敏栄

キーワード：ESD　ユネスコスクール　校長　M-GTA　インタビュー　概念　ストーリーライン　変容の種

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領（平成29年３月告示）の前文及び総則に示されているESDの理念を確実に実施するため、ユネスコスクール年次活動調査に示されている「教職員のESDに対する理解が不十分である（ACCU、2014～2017）」という課題を克服する必要がある。そのため、持続的・効果的にESDの実践を行っている学校の事例を基に「どのようにESDが理解され、実践につながっているのか」を明らかにすることを目指し、本研究の目的を「持続的・効果的にESDの実践を行うために、校長がどのようにESDを理解し実践につなげているのかを明らかにした、概念間のストーリーラインを作る」とした。

２　研究の方法

(1) 研究対象校の設定

ESD大賞を受賞しているユネスコスクールをロールモデルとし、「持続的・効果的にESDの実践をしているユネスコスクール」として研究対象校とした。

(2) 調査対象の焦点化と選定

調査対象を教育課程編成の責任者である校長に焦点化することで、学校全体における「ESDの理解から実践までの流れ」を明らかにすることができると判断した。そのため、ESD大賞を受賞したユネスコスクールの受賞時の校長４名を調査対象者とした。

(3) M-GTA（修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ）による分析

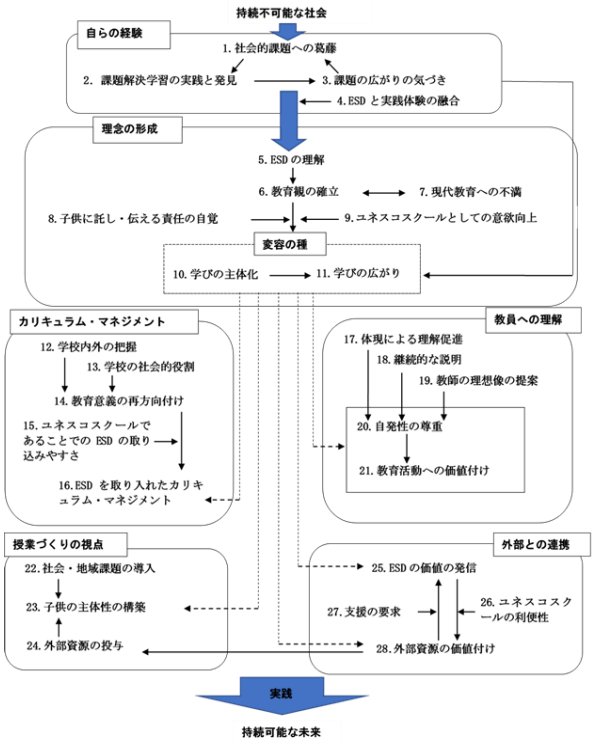
「ワークシートを用いて、データの解釈から説明力のある概念生成を行い、その概念の関連性から、まとまりのある理論を創る方法」であるM-GTAを分析手法にした。「理解から実践まで」の概念間の関連性をストーリーラインとして図式化することで、分かりやすい理論の図として成果を出すことにした。

(4) インタビュー調査

M-GTAの分析に適したデータは、調査対象者へのインタビューを行うことで収集した。その際、研究設問を「①どのような経験から、どのようにESDを理解しているのか」、「②ESDの実践に対して、どのような理念をもっているのか」、「③学校を取り巻く環境にどのようにアプローチしているのか」の三点とし、半構造化されたインタビュー調査を行った。

３　研究の結果

インタビュー内容を文字化し、複数の校長から現れた事象のみをワークシートに取り出し、概念名を生成した。生成された概念は、まとまりのあるカテゴリーとして、新たにカテゴリー名を生成した。その際、「校長の専門職基準（日本教育経営学会、2012）」の表記を参考にし、「カリキュラム」、「教員」、「授業」、「外部」の四項目を「学校を取り巻く環境」としてカテゴリー名に組み込んだ。各カテゴリー内の概念の流れや、各カテゴリー間をつなぐ概念の流れを分析し、矢印で表した。その結果、「校長がESDを理解し、学校を取り巻く環境に、どのような理念をもってアプローチすることで、ESDの実践につなげているのか」を表したストーリーラインが図１である。



（図１　概念間のストーリーライン）

⑴ 「自らの経験」から「ESDの理解」へ

社会的な課題を題材に、課題解決学習を繰り返し実践していく中で、一つの課題が他の社会的な課題へとつながっているという「課題の広がり」を認識していた。その後、ESDと出会うことで、ESDの理解が促進されていることがうかがえたのでストーリーラインで示した。

⑵ 「理念の形成」

ESDを「個人が変容した後、社会の変容へとつながっていくための教育」であると理解していることがうかがえた。校長は、その理解からESDを含んだ教育観を確立しており、中心には、「変容」という理念がある。主体的な学びが行われて、次の学びへと広がりを見せている状態を「変容」として評価している。この一連の流れをストーリーラインで示した。

⑶ 「ESDの実践」へ

「変容」するためには、学びが主体化され、広がりをもつ必要があると考えていた。この「変容の種」という概念を、「学校を取り巻く環境」である４カテゴリー内のどの概念にアプローチしているのかを表した様子を、ストーリーラインで示した。アプローチされている概念には、点線の矢印でその様子を表した。以下に詳しく説明する。

ア 「カリキュラム・マネジメント」

学校に赴任した際、学校環境の把握から、教育活動の再方向付けを行っていた。その後、教育課程編成を行う際に、「変容の種」という視点をもって取り組んでいたため、概念16「ESDを取り入れたカリキュラム・マネジメント」にアプローチしているとして、ストーリーラインで示した。

イ 「教員への理解」

校長自ら体現したり、実際に説明したりすることで、ESDの理解を得ようとしていた。そして、教員が主体的に行う教育活動に対して、広がりをもたせ、価値付けを行っていた。よって、概念20「自発性の尊重」から、概念21「教育活動への価値付け」への流れに対し「変容の種」という視点をもってアプローチしていることをストーリーラインで示した。

ウ 「授業づくりの視点」

授業に社会的課題を導入することで、子供たちに主体性をもたせる授業構成に価値を感じていた。そのため、概念23「子供の主体性の構築」に対して「変容の種」という視点をもってアプローチしていることを、ストーリーラインで示した。

エ 「外部との連携」

自校でのESDの実践を、外部資源と関連させ、価値付けをして発信をしたり、外部の資源に価値を感じ、教育活動に取り込もうとしたりしていた。この一連の流れが繰り返し行われているため、概念25「ESDの価値の発信」と概念28「外部資源の価値付け」の両方に「変容の種」という視点をもってアプローチしていることをストーリーラインで示した。

４ 研究の考察

研究の目的を達成するために立てた、三点の研究設問に基づいて、研究で得られた知見を総括する。

⑴ どのような経験から、どのようにESDを理解しているのか

継続的な課題解決学習を実践していた経験から、ESDを理解できる土壌を構成したと考えられる。また、社会的な課題にシステム思考で疑問をもち続けていたことも、理解を促進したと考えられる。ESDの理解では、「個人の変容を生み、社会の変容へとつながるための教育がESDである」と考えていることがうかがえた。

⑵ ESDの実践に対して、どのような理念をもっているのか

全ての学びが主体化され、そこから様々な学びへと広がりをもたせることで「変容」を生み出そうと考えていることがうかがえた。

⑶ 学校を取り巻く環境にどのようにアプローチしているのか

「主体化からの広がり」という状態を評価 しており、「いかに主体的になるのか」、「いかに広げられるのか」という視点をもって、学校を取り巻く環境全てにアプローチするようなマネジメントをしていることがうかがえた。周囲の人たちの変容に対して「変容を見取り価値付ける力」が、校長には必要であることも明らかになった。

５ 今後の展望

ESDを行うことで、子供自身が感じている「自分の変容」を明らかにし、効果を検証していくことが、今後の課題となる。また、指導主事として、ESDの実践を踏まえた講演や研修を積極的に企画・運営し、本研究の成果を広めていく。